

# 外国ルーツの子どもにとっての食の意味

水野 かほる・角替 弘規

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）  
第20巻第1号（2021年9月）抜刷

## 【論文】

## 外国ルーツの子どもにとっての食の意味

水野 かほる・角替 弘規

## 1. はじめに

本研究は外国にルーツを持つ子どもたちの食の実態を明らかにするとともに、かれらにとって日常生活における「食」がどのような意味を持っているのかについて検討することを目的とする。

2020年6月末現在における在留外国人数は288万5904人であり（出入国在留管理庁2020）、過去最高を記録した前年度から1.6%減少したものの、依然として日本の歴史上かつてないほど多くの外国人が在留している。新型コロナウイルスの影響から2021年度にはさらにその人数は減少する可能性があるものの、ワクチン接種等の感染対策が普及した暁には、再び在留外国人数が増加する可能性は十分にある。

急速かつ長期的な少子高齢化を孕んだ人口減少を背景に、2019年4月に施行されたいわゆる「改正入管法」によって新たな在留資格として「特定技能」が定められたように、現在の日本社会は特にエッセンシャル・ワークにおける外国人労働力に対する需要が高まりつつある。このことは、日本社会が今後長期にわたって外国人労働者を受け入れる必要に迫られていることを暗示するものであり、日本社会として外国人をどのように受け入れるのか、その検討は急務であると考えられる。

上記のような将来に向けての検討と並んで、改めて注目しなければならないのは、既に300万人に迫る外国人が日本社会を生活の拠点として長期滞在しており、家族を構成しているという事実である。なかでもかれらが日本に滞在中に生まれた子ども、あるいは出身国から呼び寄せて日本で育った子どもたち（以後、本稿では「外国ルーツの子ども」と表記）は、自らの意思で来日を選択したのではなく、あくまでも保護者に従属する形で日本での生活を余儀なくされている。それ故に、かれらの将来の進路選択あるいは就業・配偶者選択といった人生の節目々々において主体的な判断ができるよう、十分な権利保障と教育機会の保障が必要である。

筆者らは、それぞれの立場において、外国人あるいは外国ルーツの子どもに対する教育に直接接する機会を持ち、かれらが日本社会においてどのような境遇にあるのかを知りうるが、様々な場面において、日本社会が外国人に対して期せずして多くの困難を強いている現実を目の当たりにしている。とりわけ外国ルーツの子どもの教育に

関しては、多くの子どもが日本の学校に適應するに当たって学習面・生活面の様々な場面で困難を抱えている。

本研究の着想に至ったのは、筆者（角替）がかつて外国ルーツの子どもの学習支援に当たる中で経験に基づく。かつて筆者（角替）が参加していた学習支援教室<sup>1</sup>において、当時中学生だった南米出身の男子生徒Fは、学習が苦手な教室においてもなかなか勉強に取り組まなかったのであるが、彼の話聞くうちに、彼は教室が始まる18時までにはほとんど食事をとることがなく、非常に空腹な状態で教室に来ていることが分かった。また、家庭での食生活も乱れがちであり、なかなか学習に集中できる環境にないことが明らかとなった。その後、別の学習支援教室<sup>2</sup>に通う子どもについても食生活に乱れのある子どもが散見され、こうした子どもたちの食のあり方についても検討を進める必要があると考えるようになった。また、かれらの食を巡る状況がかれらの学習にも何らかの影響を及ぼしている可能性があることも推測された。しかしながら、かれらの食の実態に焦点を当てた研究は管見の限りほとんど見当たらない。まずは外国ルーツの子どもたちの食をめぐる状況から把握する必要があると考えた。

そこで本研究では以下のリサーチクエスチョンを設定した。

1. 外国ルーツの子どもの食の実態はどのようなものか
2. 外国ルーツの子どもの食に対する意識はどのようなものか

以上のリサーチクエスチョンを明らかにすることから、かれらに対する食育のあり方についてその方向性を考察する。

（角替・水野）

## 2. 先行研究の検討

外国ルーツの子どもの教育に関しては、日本語教育の分野において実践的な指導法を含め多くの研究蓄積が認められる。また留学生については、高濱・田中（2014）や田中・中野（2016）が日本の大学に留学した留学生の食生活に着目し、異文化適應の観点から留学生の食育のあり方を検討している。これらの研究の対象は日本の大学の留学生を対象とした分析であり、日本で生活する外国ルーツの子どもは研究の射程に含まれていない。

教育学関連の分野においては、外国ルーツの子どもたちの学校適應に関する研究についてはかなりの蓄積が認められるところである。例えば恒吉（1996）や太田（2000）が明らかにしたのは日本の学校の同化装置としての側面であり、「一斉共同体主義」（恒吉・同）的な学校文化が外国ルーツの児童生徒に対して非常に抑圧的に作

1 NPO 法人教育支援グループ Ed.ベンチャー2018年度神奈川県厚木市保健福祉事務所委託事業「Friends★Star 教室」

2 NPO 法人教育支援グループ Ed.ベンチャー「エステレージャ・ハッピー教室」

## 外国ルーツの子どもにとっての食の意味

用していることが指摘されている。また志水・清水（2001）は日本の学校の中で外国ルーツの児童生徒が抱える様々な困難が「個人化」されていくプロセスを明らかにした。一方で児島（2006）は外国ルーツの児童生徒が同化圧力の強い日本の学校文化の中で対抗的な軸を構築し自らのあり方を模索する姿を描き出している。これら教育学研究の一連の研究蓄積の中で、日本の学校における外国ルーツの子どもたちの姿はかなり克明に明らかにされつつあるものの、その中心的な関心は学力や教育達成、地位達成に焦点が当てられており、外国ルーツの子どもの食に対しては研究の対象として着目されることは数少ない。

例えば野田（2011）は外国人集住地域における外国籍の親と子どもを対象とした食育活動の実践を行っているものの、報告の中心は食育の実践に焦点付けられている。在日外国人の食生活に関する調査研究は看護系においてもいくつか見受けられるところであり、例えば柴崎・水口・多賀谷（2007）や吉岡・田代（2008）は長野県における在日ブラジル人の成人あるいは幼児の食生活の調査を行っている。ただしいずれも学齢期の児童生徒を対象としておらず、外国ルーツの子どもたちの日常における食のあり方や、かれらに対する食育のあり方が検討の対象となっているわけではなかった。

（角替）

### 3. 研究の方法と対象

本研究では静岡県内に在住する外国ルーツの学齢期にある児童生徒を対象とした。ちなみに、静岡県の外国人人口は2018年12月末現在で89,341人（静岡県地域外交局多文化共生課2019）であり、うちブラジル人が最も多く、27,904人（31.2%）である。とはいえ、静岡県内のブラジル人数は2007年の51,900人をピークに減少し、一方、フィリピンやベトナム人の人口が増加している。南米系外国人が多くブラジル人学校が複数存在する静岡県では、2020年5月現在、南米系8校、朝鮮系1校の外国人学校があり、2015年より2校減少している。こうした状況の中、上記のリサーチクエストを明らかにするために、本研究では静岡県A市立B小学校の5～6年生9名と同じくA市立C中学校1～3年生32名の合計41名、そして静岡県D市内のブラジル人学校E校に通学する72名に対して自記式質問紙調査を実施した。

以下、調査対象校とそれぞれの地域についての概況を記す。

静岡県A市は県中部に位置する水産業と水産加工業を主たる産業基盤とする人口約14万人の地方都市である。近年は水産加工業に従事する外国人労働者が増加しつつあり、A市の総人口に対する外国人比率は3.0%を示している（静岡県2020）。これは日本全体の割合（2.3%（法務省2020））からすると、高い水準にある。エスニシティ別では日系フィリピン人の割合が高い。

A市立B小学校およびC中学校における調査については、A市教育委員会を通して

各学校長に調査実施を依頼し承認を経たうえで実施した。調査には筆者（角替）が立ち会い、回答上の質問等に対応しつつ回収も行った。回答した児童生徒はいずれも対象校の外国人児童生徒のための通級指導教室に在籍しており、普段は当教室において日本語指導等を受けている。調査票は日本語によるが、日本語が不得意な児童生徒に対しては一部英語によって説明をするなどして回答を得た。尚、B小学校及びC中学校の調査対象者の国籍はフィリピン、ブラジル、ペルー、インドネシア、日本であり、このうちフィリピンが半数以上を占め最も多く、ブラジルは約2割にとどまっている。

一方のD市は静岡県西部に位置する人口16万の地方都市であり、自動車や二輪車の機械部品製造業を主たる産業とする。総人口に対する外国人比率はA市よりも高い4.6%（静岡県、同）であり、全国的に見ても高水準である。

今回調査を実施したE校はD市にある保育所に併設するブラジル人学校で、就学前課程から中等課程までが学んでいる（2020年5月現在、在籍生徒数131名）<sup>3</sup>。本国ブラジルの教育課程に沿った教育を行っており、各種学校の認可は受けていない。

E校の特徴について、かつて同校を調査したハヤシザキ（2004）は、「家族的」な環境での「全人教育」と表現している。経営者夫妻の努力により、子どもと保護者の利益が優先されてきた。子どもたちの毎日は、朝はスクールバスが子どもたちを迎えに行き、学校についてから学校の調理場で作られた朝食を食べ、その後、授業に出るから放課後を過ごす。同校は学校であると同時に子どもたちの生活の場でもあると言えよう。

E校では、2007年から日本人講師による日本語の授業が行われているが、授業時間は週1回である上、生徒は日本語不要の生活環境にあるため、あまり学習成果が上がっているとは言えない。また、E校には、2013年から静岡県立大学国際関係学部の学生が訪問して日本語授業をサポートする活動を行っている。日本語を学習する生徒を対象とした簡単なアンケート調査を実施したこともあり（高畑・水野2017）、その結果を見ると、生徒たちの日本・日本人への印象は悪くなく、日本語学習や日本語習得が役に立つという認識も持っている。しかしながら、日本人との直接的対面的な接触が少なく、日本語を話したり聞いたりする経験が乏しい状況が存在していることが明らかとなった。

上記のように、E校では日本の公立学校と同様の学校給食は提供されていないため、昼食の実態に合わせて調査票の一部を変更した。また、日本語が不得手な児童生徒も少なくないため、ポルトガル語訳の調査票を用意した。対象児童生徒の学年は小学5～6年生相当が30名、中学1～3年生相当が28名、高校1～3年生相当が14名である。国籍は全員がブラジル国籍である。

（水野・角替）

3 静岡県県民生活局多文化共生課資料による。

#### 4. ブラジル人学校に通う子どもたちの食生活の特徴と課題（ブラジル人学校調査から）

##### (1) 家庭の状況

子どもたちの食の状況について分析・考察する前に、子どもたちの家庭の状況について若干触れておきたい。それは子どもたちの食のあり方はかれらの保護者の状況に大きく依存すると考えるからである。

今回の調査対象者の家族の人数は平均で2.6人であり、きょうだいの数も1.1人と家族の規模として特に大きな家族構成ではなかった。シングル家庭の割合は12.8%であった。

保護者の就労状況について見ると、母親はブルーカラー職66.7%、ホワイトカラー職が8.3%、無職が6.9%、その他と無回答を合わせて18.1%であった。同様に父親はブルーカラー職が84.7%、ホワイトカラー職は0.0%、無職が1.4%、その他と無回答が13.9%であった。ここからも明らかなおと、今回の調査対象者である子どもの保護者のほとんどが工場労働を中心としたブルーカラー職に就いていて、また同時に共働き家庭である。調査実施時点において、既に新型コロナウイルスの感染が拡大しつつある状況下であったが、無職である保護者はほとんど見られなかった。とは言え、調査時に伺った話では学校に通う子どもたちの家庭の多くは経済的に苦しい状況にあることが多く、学費の支払いがままならなかったり、昼食費を節約するために昼食時に帰宅したりする子どもも見られるということであった。

ブラジル人学校に見られた以上のような状況は、B小学校及びC中学校の保護者についてもほぼ共通している。B小学校及びC中学校での調査対象者の保護者のうち母親の約65%、父親の約50%がブルーカラー職に就いており、ホワイトカラー職に就いているのは父母ともに1割に満たなかった。先述のとおりA市は水産加工業が多く食品製造業が盛んなため、それらの関連工場で働いている父母が多い。

以上のように、今回の調査対象である外国ルーツの子どもたちの家庭は経済的に恵まれた層にあるのではなく、経済的な困難を抱えている可能性が高い家庭の子どもたちであることを念頭に置きながら分析・考察を進める必要がある。

##### (2) 体格

以下、ブラジル人学校の児童生徒を中心に具体的に子どもたちの食を巡る諸相を検討していこう。

まずは子どもたちの体格に着目したい。ブラジル系の幼児を中心に分析を進めた先行研究（吉岡・田代 2008）によれば、ブラジル系の3歳児は日本人幼児より肥満傾向にあることを指摘していたが、今回の調査対象者ではどのような傾向が認められるだろうか。

そこで調査対象者のうち、身長と体重について回答が得られた39名<sup>4</sup>について、ローレル指数を算出しその体格を「痩せ」「標準」「肥満」の3つに分類したところ、表1に示すような結果となった。

表1からも明らかなおと、最も多い割合を占めたのは「標準」であり5割弱がこれに当たる。残りのおよそ半数が標準から外れた体型であり、「肥満」よりも「痩せ」の子どもが多いことが分かる。

性別に着目して比較すると、「標準」は男子と女子いずれも同様の割合であったが、「痩せ」は女子よりも男子が多く、「肥満」は女子の方が多く結果となった。

学校段階別で比較した場合、「標準」であるのは高校生が多く、特に中学生において「痩せ」の割合が高いことが分かる。「肥満」はどの学校段階においても同数であった。

いずれの比較においても有意差は認められなかったものの、今回の対象者に関しては、およそ半数の子どもたちが標準体型から外れた「痩せ」か「肥満」の子どもであることが分かった。先述した先行研究(吉岡・田代 2008)における指摘とは異なり、学齢期にある児童生徒については、今回の調査では「痩せ」の子どもの方が多く認められた。

表1 ブラジル人学校児童生徒の体格 (N=39)

	全体	性別		学校段階別		
		女子	男子	小学校	中学校	高校
痩せ	35.9(14)	28.6(4)	71.4(10)	21.4(3)	42.9(6)	35.7(5)
標準	48.7(19)	52.6(10)	47.4(9)	21.1(4)	10.5(2)	68.4(13)
肥満	15.4(6)	66.7(4)	33.3(2)	33.3(2)	33.3(2)	33.3(2)

単位%、かっこ内は実数

### (3) 食事習慣

ではかれらの食事の習慣はいかなるものであろうか。かれらの平均的な摂取頻度と食事内容について検討したい。

表2に示したのは、三食(朝食・昼食・夕食)の摂取状況について尋ねた結果である。

これによると、朝食について「いつも食べる」と回答した者の割合は約1/4にとどまり、およそ3割(29.2%)が「まったく食べない」と回答していた。「ときどき食

4 今回の調査対象校では日本の学校で実施されているような定期的な健康診断が実施されていなかったため、自らの身長と体重について正確に把握していない児童生徒が少なくなかった。このため身長と体重については無理に記入を求めなかった。



## 外国ルーツの子どもにとっての食の意味

べる」と回答した者も含めると、7割以上(73.6%)の者は定期的な朝食摂取の習慣を持っていないことが明らかとなった。

表2 三食の摂取状況 (N=72)

	朝食	昼食	夕食
いつも食べる	26.4(19)	70.8(51)	77.8(56)
ときどき食べる	44.4(32)	29.2(21)	22.2(16)
まったく食べない	29.2(21)	0.0(0)	0.0(0)

単位%、カッコ内は実数

朝食について調査実施日を含めた過去3日間の朝食内容を自由回答で尋ね、各品目をカウントしたところ、牛乳・乳飲料32.4%、パン類30.8%、飲料(ジュースなど)11.0%、嗜好品6.6%、トウモロコシ4.4%、卵料理4.4%、その他10.4%という結果となった(複数回答、N=241)。かれらの朝食の内容は牛乳および乳飲料とパン類が主たるものであり、野菜はほとんど摂取されておらず、ごく簡単な調理か、まったく調理を要さないものが中心であることが分かった。

また日頃の食習慣について尋ねた質問から、朝食は平均して午前7時半頃に取りることが分かったが、ひとり、あるいはきょうだいで(すなわち子どもだけ)で摂取している者がおよそ3割(32.0%)存在することが分かった。また朝食を子どもたちが準備すると回答しているのは約25%にのぼることが明らかとなった。

昼食と夕食についても、「まったく食べない」と回答した者はいなかったものの、昼食では約3割(29.2%)、夕食では約2割(22.2%)の者が「時々食べる」という回答を示しており、いずれかの食を摂取しない子どもがある程度存在していることが明らかとなった。

また昼食と夕食の内容について尋ねた結果、昼食では、米28.4%、肉料理22.3%、豆料理8.8%、野菜6.7%、麺類6.7%、その他27.1%という内容であった(複数回答、N=389)。夕食については、肉料理23.5%、米23.2%、豆料理11.7%、野菜9.3%、パン類6.4%、その他25.9%という内容であった(複数回答、N=368)。昼食と夕食はいずれも米と肉料理が主たる内容となっており、野菜の摂取が少ない傾向にあることが認められた。朝食においては子どもだけで取っている傾向が認められたが、夕食に関しては86.1%の者が家族と一緒に食べていると回答しており、夕食を子ども一人だけで摂取している者は1.4%に過ぎなかった。

以上のことから、外国ルーツの子どもたちの食習慣、とりわけ朝食の摂取状況については、いつも摂取しないあるいは朝食を抜くことがある子どもが相当数存在することが分かった。また、朝食の準備を自分も含めた子どもたちが行っている家庭も少なからず存在していることから、この背景には親の就業状況などの影響もあるものと考え



えられる。

昼食・夕食の内容をみても、米と肉を中心とした食事内容であることが推測でき、野菜の摂取が少ない可能性が高いことが示唆された。子どもたちに食と健康について教える際には野菜摂取の重要性を強く訴える必要があると思われる。また朝食を子どもたちだけで準備する状況に置かれた子どもが少なからずいることから、子どもたち自身がバランスの良い食材の選択を促す工夫が求められる。

(角替)

## 5. 日本食に対する親和性の高さと言語の関係

では外国ルーツの児童生徒の日本食に関する食の実態や意識の持ち方はどのようなもののだろうか。ここでは特に外国ルーツの児童生徒の継承言語能力と日本語言語能力に着目し、日本食に対する意識について分析検討する。

調査にあたって、それぞれの学校の児童生徒に、継承言語（ブラジル人学校ではポルトガル語、公立学校では親の言語）に関する四技能（話す・聞く・読む・書く）について「とてもできる」「まあできる」「あまりできない」「まったくできない」の4段階で自己評価を求めた。これをそれぞれについて得点化し、すべての技能について「とてもできる」と回答した者を「高群（満点群）」、それ以下のものを「低群（非満点群）」として操作的に定義し、これらを独立変数として食の実態や食意識を尋ねた項目について比較した。

まずブラジル人学校の児童生徒について、継承言語であるポルトガル語の能力別に比較すると（表3）、ポルトガル語の能力が高い児童生徒の方が、家庭でブラジル料理を食べる機会が多く、「おいしいものを食べたい」という食に対する関心が強く、健康や食べ物に対する関心が高い傾向が認められる。ポルトガル語の能力が高いということは、それだけ保護者とのコミュニケーションも円滑であるということであり、食事を通してのコミュニケーションが図られることから、食に対する意識も高くなっているのではないかと推測できる。

## 外国ルーツの子どもにとっての食の意味

表3 継承言語能力別にみた食意識の比較(ブラジル人学校)

家でブラジル料理を食べる*		
ポルトガル語	食べる	食べない
満点群(N=53)	100.0(53)	0.0(0)
非満点群(N=17)	94.4(17)	1.1(1)
美味しいものを食べたいと思う**		
ポルトガル語	そう思う	そう思わない
満点群(N=53)	100.0(53)	0.0(0)
非満点群(N=17)	17.6(3)	82.4(14)
好きなものだけ食べればよいと思う*		
ポルトガル語	そう思う	そう思わない
満点群(N=53)	48.1(25)	51.9(27)
非満点群(N=16)	82.4(14)	17.6(3)
身体によい食べ物を食べたいと思う*		
ポルトガル語	そう思う	そう思わない
満点群(N=53)	92.5(49)	7.5(4)
非満点群(N=17)	75.0(12)	25.0(4)
食べ物のいろいろなことについて知りたい*		
ポルトガル語	そう思う	そう思わない
満点群(N=53)	81.1(43)	18.9(10)
非満点群(N=17)	58.8(10)	41.2(7)

\*\*\*p&lt;0.001, \*\*p&lt;0.01, \*p&lt;0.1, 単位%、かっこ内は実数

では日本語能力別について比較した場合はどうだろうか。

日本語能力別の比較では、有意差が認められる項目がほとんど見いだせなかったが、唯一、「同じものを食べた方が楽しいと思う」という項目について10%水準での有意差が認められた(表4)。これはあくまでも仮説の域を出ないが、ブラジル人学校に通う児童生徒の中には日本の公立学校に在籍していた経験を持つ者もあり、そうした経験を持つ者が学校給食を経験したことが「同じものを食べた方が楽しい」という意識につながっている可能性も考えられる。

表4 日本語能力別にみた食意識の比較(ブラジル人学校)

日本語	家族で同じものを食べた方が楽しいと思う*	
	そう思う	そう思わない
満点群(N=39)	51.3(20)	48.7(19)
非満点群(N=32)	31.3(10)	68.8(22)

\*\*\*p&lt;0.001, \*\*p&lt;0.01, \*p&lt;0.1, 単位%, かつこ内は実数

次に日本の公立学校の外国ルーツの子どもについて検討する。

継承言語能力別について見ると、有意差が認められる項目はほとんどなく、唯一「好きなものだけ食べれば良いと思う」について10%水準での有意差が認められた(表5)。ただし、表としては示していないが、母国の料理に対する好みを四分位で尋ねたところ、継承言語能力の高い生徒の70.4%が母語料理を「とても好き」と回答しており、これは、日本語能力が高い生徒の35.7%と大きな違いを示していた。日本語能力の高い生徒は日本での生活が長かったり日本人との接触が多かったりするため、日本の食生活への馴染み度が高くなっているのではないかと考えられる。

表5 継承言語能力別にみた食意識の比較(公立学校)

継承言語(親の言語)	好きなものだけ食べれば良いと思う*	
	そう思う	そう思わない
満点群(N=18)	55.6(10)	44.4(8)
非満点群(N=22)	18.2(4)	81.8(18)

\*\*\*p&lt;0.001, \*\*p&lt;0.01, \*p&lt;0.1, 単位%, かつこ内は実数

では次に日本語能力別に見てみよう。

日本語能力別では表6に示したとおり、4つの項目において有意差が認められた。ここでは特に食に対する意識よりも、食の実態との関係が見て取れる。すなわち、日本語能力が高い児童生徒の方が自宅でも日本食に接する機会が多いということである。また、「一緒に食事をするとうまくいけると思う」において、日本語能力が高い者のすべてが「そう思う」としている点に注目したい。これは単に食事を共にすれば他者との良好な人間関係が構築できるという単純なことではなく、一緒に食事をする他者と円滑なコミュニケーションが取れることが良好な関係を構築するうえで重要であるということを示唆していると思われる。

この点について、給食の選好を手掛かりに、もう少し考察したい。

## 外国ルーツの子どもにとっての食の意味

表6 日本語能力別にみた食意識の比較(公立学校)

自宅で日本料理を食べる*		
日本語	食べる	食べない
満点群(N=14)	85.7(12)	14.3(2)
非満点群(N=27)	48.1(13)	51.9(14)
誕生日などに日本料理を食べる***		
日本語	食べる	食べない
満点群(N=14)	92.9(13)	7.1(1)
非満点群(N=27)	37.0(10)	63.0(17)
美味しいものを食べたいと思う*		
日本語	そう思う	そう思わない
満点群(N=14)	85.7(12)	14.3(2)
非満点群(N=27)	100.0(27)	0.0(0)
一緒に食事をすると仲良くなれると思う*		
日本語	そう思う	そう思わない
満点群(N=14)	100.0(14)	0.0(0)
非満点群(N=27)	75.0(12)	25.0(4)

\*\*\*p&lt;0.001, \*\*p&lt;0.01, \*p&lt;0.1, 単位%, かつこ内は実数

学校給食の選好に関する質問では、有意差は認められなかったものの、日本語能力が高い生徒に給食が好きだと答える者の割合が高い傾向が認められた（日本語力高：92.3%，日本語力低：77.7%）。さらに給食が「とても好き」「まあ好き」と答えた生徒の理由に着目すると、「美味しいから」や「好きなものが食べられるから」という理由には日本語能力の影響は認められなかった。しかしながら、「友だちと一緒に食べられるから」では、日本語能力の高い生徒の66.7%が「とてもあてはまる」と回答し、日本語力の低い生徒の19.0%を大きく上回った（10%水準で有意）。また、「友だちと同じ食べ物が食べられるから」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答したのは、日本語能力の高い生徒の83.3%であった。即ち、公立学校の外国ルーツの児童生徒にとって給食の選好と日本語能力は大きな関わりを持っており、そこには食事の味や好きな食べ物かどうかということより、友だちと同じものを一緒に食べるという「給食＝コミュニケーションの時間」という認識が育っていることが伺える。

また、日本語能力の高い生徒に「食事のマナーは守らなくていいとは全く思わない」という回答が非常に多かった（71.4%）。ここには以下で述べる、日本の学校給食が食事を与えるだけに留まらない食育を担っていることの表れではないかと思われる。

(水野)

## 6. 学校別に見た食規範意識の比較

次に外国ルーツの子どもたちが食に対してどのような意識を持っているのかについて、ブラジル人学校と日本の公立学校に通う児童生徒の間にどのような違いが見られるのか検討した。いずれの学校においても、質問紙において18項目の質問を設定したが、これらのうちカイ二乗検定において10%未満の有意差が認められたものを表7に示した。

表7 食に対する意識の学校間比較

	美味しいものを作りたい**	
	そう思う	そう思わない
ブラジル人学校(N=70)	81.2(56)	18.8(13)
公立学校(N=41)	95.1(39)	4.9(2)
	食べ物に感謝**	
	そう思う	そう思わない
ブラジル人学校(N=70)	74.3(52)	25.7(18)
公立学校(N=41)	95.1(39)	19.5(8)
	好きなものだけ食べていれば良い**	
	そう思う	そう思わない
ブラジル人学校(N=70)	56.5(39)	43.5(30)
公立学校(N=41)	34.1(14)	65.9(27)
	みんなで一緒に食べた方が楽しい	
	そう思う	そう思わない
ブラジル人学校(N=70)	84.5(60)	15.5(11)
公立学校(N=41)	92.7(38)	7.3(3)
	みんなで同じものを食べた方が楽しい***	
	そう思う	そう思わない
ブラジル人学校(N=70)	42.3(30)	57.7(41)
公立学校(N=41)	80.5(33)	19.5(8)
	食事のマナーは守らなくても良い*	
	そう思う	そう思わない
ブラジル人学校(N=70)	51.4(36)	48.6(34)
公立学校(N=41)	31.7(13)	68.3(28)
	季節を意識した料理を食べたい**	
	そう思う	そう思わない
ブラジル人学校(N=70)	52.1(37)	47.9(34)
公立学校(N=41)	75.6(31)	24.4(10)

\*\*\*p&lt;0.001, \*\*p&lt;0.01, \*p&lt;0.1, 単位%, かつこ内は実数

## 外国ルーツの子どもにとっての食の意味

表7から明らかなことは以下の点である。

一つには、日本の公立学校の児童生徒とブラジル人学校の児童生徒の間には、食に関する規範意識に相違が見られるという点である。例えば、「好きなものだけ食べていけば良い」という考え方について、ブラジル人学校の児童生徒の半数以上が「そう思う」と回答しているのに対して、公立学校の児童生徒では3割強が「そう思う」と回答しているにとどまっている。同じく「食事のマナーは守らなくても良い」についても、ブラジル人学校の児童生徒の約半数、公立学校の児童生徒の約3割が「そう思う」と回答している。「食べ物に感謝」については、ブラジル人学校の7割以上、公立学校では実に9割以上が「そう思う」と回答し、いずれも「そう思う」とする割合が高いものの、1%水準の有意差が示された。これらの項目が示すように、ブラジル人学校の児童生徒の方が食に対してより自由な意識を持つ傾向にあることが窺える。先述のとおり、今回の調査を実施したブラジル人学校では、日本の学校給食のような給食は提供されておらず、学校での昼食は子どもたちが自由に選択できる形式をとっている。教員は子どもたちとは別の場所で昼食を取り、日本の学校のように「給食指導」という捉え方はされていない。従って、食に対する意識の持ち方も個人の選択や自由を重視した意識の持ち方になっているように思われる。

上記に関連して二つ目に指摘したいのは、日本の公立学校の方が食に対する同調圧力が強い可能性があるということである。表5の中に「みんなで一緒に食べた方が楽しい」という項目を示したが、この項目については有意差が認められなかった。すなわち「一緒に食べた方が楽しい」かどうかについてはブラジル人学校であっても公立学校であっても、どちらの児童生徒も「そう思う」と回答しており差が見られないということである。しかしながら「みんなで同じものを食べた方が楽しい」かどうかについて「そう思う」と回答したのは、ブラジル人学校では4割強にとどまる一方、公立学校では約8割の児童生徒が「そう思う」と回答していた。みんなで一緒に食べることについては差が見られなかったにもかかわらず、「同じものを食べるかどうか」については両校で大きな違いが見られたということになる。すなわち、日本の公立学校においては、学校給食によって全員が同じメニューを喫食することとなっており、こうした経験の積み重ねから「同じものを食べた方が楽しい」という意識に寄与していることが推測される。

(角替)

## 7. まとめ—外国ルーツの子どもにとっての食の意味とかれらへの食育の方向性

今回の分析から明らかになったことは以下のようにまとめることができる。

一つ目は、特にブラジル人学校の児童生徒の調査結果から、外国ルーツの児童生徒の食生活はやや乱れがちであり、特に朝食摂取の不規則さが目立つということである。

今回の調査では肥満傾向にある児童生徒が特に多く認められたわけではなかったが、逆に痩せの傾向にある児童生徒が認められた。新型コロナウイルスの影響もあって、家庭の経済状況が悪化している家庭も認められるようであり、そうした点も食習慣の不規則化に影響を与えていることも考えられる。

二つ目には、外国ルーツの児童生徒にとって、食は単に栄養摂取の場であるだけでなく、コミュニケーションの場としての意味を強く持つ可能性が示唆された点である。ブラジル人学校のポルトガル語に長けた児童生徒の間では、食に対する意識が高く保持されている傾向が認められた他、日本の公立学校の児童生徒の間では、同じものを食べるということの楽しさや重要性への認識が強い傾向が認められた。すなわち、食は他者とのコミュニケーションの機会としての意味を有するのであり、「同じものを食べる」ということの規範性が伝承されているものと考えられる。

それは本研究の最後の部分で、ブラジル人学校と公立学校の児童生徒の食に対する意識の持ち方の比較においても明らかである。すなわち、公立学校で給食を日常的にとっている児童生徒の方が、規範的な食意識を身につけている傾向が認められ、ブラジル人学校の児童生徒はより個人的な価値観を保持している傾向が認められることから、日常的に過ごしている学校（場所）が児童生徒の食意識、食に対する価値観に大きな影響を及ぼしている可能性が認められるということである。

ところで、「食育」という用語は、佐々木（2015）によれば、日本では明治時代から使用されていたとされる。近年になってからは、2005年に食育基本法が施行され、2009年に学校給食法が改正され、学校給食の中に栄養補給に加えて「食育」が加えられたが、その内容は、食に向かう「心構え」「流通」「栄養」「食し方」「食文化」を含む幅広い教育体系と指摘される。また、学校給食での食育は、家庭で行いにくい食育が期待されていることから、バランスの取れた栄養摂取、食べ物を粗末にしないという価値観、準備から片付けに至るプロセスの習得、規則性、偏食の矯正、食文化の理解、食事作法の修得といったことが求められるという。したがって、学校給食には社会的な役割が期待されるのであるが、とりわけ「皆で同じものを一緒に食べられること」という価値に力点が置かれる。そしてそれらを通して、クラスの子どもたちが皆格差なく同じものを一緒に食せることの意義とそれがコミュニケーション豊かな人生につながることにその意義を見出すのである。

今回の調査からも、学校での食のあり方が児童生徒の食意識に大きく影響を与えていることが示唆されたが、上記食育の観点を踏まえるならば、外国ルーツの子どものように、一般的な日本人児童生徒とは異なり多様な背景を持つ子どもの存在を考慮した際に、「同じもの」に代表される「モノ」的な価値観への過度な同調については十分注意を払いたいと考える。太田（2000）は、現在の日本の学校教育について、外国ルーツの子どもたち固有の文化を奪い、日本の文化を新たな文化として強要する「奪文化的教育」的な側面があると指摘する。ともすれば学校給食は食に関する「奪文化



## 外国ルーツの子どもにとっての食の意味

的教育」ともなりかねない危険性を孕んでいる。今後ますます外国ルーツの児童生徒が増えるであろうことを考慮するならば、食育においても多様な文化と背景を持つ子どもたちの存在も意識した方向性が求められるだろう。(水野・角替)

## 【参考文献・資料】

- ハヤシザキカズヒコ (2014) 「第1章 家族のような学校エートスと全人教育—エスコラ・オブジェチーボ・ジ・イワタ」 志水宏吉・中島智子・鍛冶致編著『日本の外国人学校—トランスナショナリティをめぐる教育施策の課題』明石書店、226-241.
- 法務省 (2020) 在留外国人統計表 [http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html) (2021年6月27日アクセス).
- 児島明 (2006) 『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房.
- 野田雅子 (2011) 「外国籍の親と子どもたちへの食育活動について—豊田市保美地区での実践報告—」『人間文化研究』名古屋市立大学大学院人間文化研究科、16: 157-167.
- 太田晴雄 (2000) 『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
- 佐々木輝雄 (2015) 『学校給食の役割と課題を内側から明かす』筑波書房.
- 芝崎亜希子・水口雅子・多賀谷昭 (2007) 「長野県上伊那地域に暮らすブラジル人の食事を中心とした生活習慣」『長野県看護大学紀要』9: 75-85.
- 志水宏吉・清水睦美編 (2001) 『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店.
- 静岡県 (2020) 静岡県市町村別推計人口 <https://toukei.pref.shizuoka.jp/jinkoushugyouhan/data/02-030/0211jinkou.html> (2021年6月27日アクセス).
- 静岡県地域外交局多文化共生課 (2019年2月) 「静岡県における外国人の住民基本台帳人口の調査結果」(平成30年12月31日現在) <http://www.pref.shizuoka.jp/kenmin/km-160/documents/h30kh.pdf> (2021年6月27日アクセス).
- 出入国在留管理庁 (2020年10月9日) 「令和2年6月現在における在留外国人数について」報道発表資料 [http://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04\\_00018.html#:~:text=%E4%BB%A4%E5%92%8C%EF%BC%92%E5%B9%B4%EF%BC%96%E6%9C%88%E6%9C%AB%E7%8F%BE%E5%9C%A8%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E4%B8%AD%E9%95%B7%E6%9C%9F,%EF%BC%96%EF%BC%85%EF%BC%89%E6%B8%9B%E5%B0%91%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82](http://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04_00018.html#:~:text=%E4%BB%A4%E5%92%8C%EF%BC%92%E5%B9%B4%EF%BC%96%E6%9C%88%E6%9C%AB%E7%8F%BE%E5%9C%A8%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E4%B8%AD%E9%95%B7%E6%9C%9F,%EF%BC%96%EF%BC%85%EF%BC%89%E6%B8%9B%E5%B0%91%E3%81%97%E3%81%BE%E3%81%97%E3%81%9F%E3%80%82) (2021年6月27日アクセス).
- 高畑幸・水野かほる (2017) 「日本語教育ボランティア活動を通して見たブラジル人学校の子どもたち—静岡県磐田市のブラジル人学校の事例からの考察—」『国際

関係・比較文化研究』第14巻第2号、171-189.

高濱愛・田中共子 (2014) 「在日メキシコ人留学生の食生活の変遷に関する事例的研究—5名の渡航前から現在に至る詳細から食育への示唆を探る」『人文・自然研究』No.8, 190-205.

田中共子・中野祥子 (2016) 「在日外国人留学生における食の異文化適応—異文化間食育への示唆」『異文化間教育』No.44, 116-128.

恒吉僚子 (1995) 「教育の中の社会—日本の教室文化とニューカマーの子どもたち」佐藤学編『教室という場所』国土社, 185-214.

吉岡鮎子・田代麻里江 (2008) 「長野県在住ブラジル人3歳児の食生活・肥満・う歯」『長野県看護大学紀要』10:47-56).

本研究は、令和2年度内閣府地方創成推進交付金 健康食イノベーション事業（グローバル班）による研究成果の一部である。また、調査の実施にあたって多くの方々にご協力いただきました。心より感謝申し上げます。